The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Quoi qu'il en soit の機能分析
Author(s)	川北, 恭子
Citation	言語文化研究. 2011, 37, p. 291-314
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24685
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Quoi qu'il en soit の機能分析

川　北　恭　子

Le présent article a pour but de mettre en lumière la fonction de *quoi qu'il en soit* (QQS). Etant donné que QQS est composé de *quoi que* dont le sens est *quelle que soit la chose que*, qui marque la concession, nous présupposons que QQS contient ce sens également. Il n'en reste pas moins que nous repérons difficilement ce à quoi renvoie le pronom anaphorique *en*, qui le compose. Aussi, en essayant de l'identifier, observons-nous le déroulement du discours au point de vue de son arrêt et de sa reprise. Notre analyse soutient ce qui suit : le renvoi de *en* est le thème de la question dont une des réponses est l'énoncé précédent, qui constitue, avec d'autres énoncés explicites ou non en tant que réponses possibles, une stagnation dans le déroulement du discours, et à laquelle QQS a pour fonction de mettre un terme pour reprendre le déroulement antérieur par l'énouncé suivant QQS. La mise en relation de l'énoncé précédent avec l'énoncé suivant se fait sans l'intermédiaire de l'implicite.

キーワード：連結詞，談話，復帰

1. はじめに

筆者は，連結詞研究の一環として今まで川北(2003,2006a,2006b,2009)でaprès tout（以後ATと略記）やde toute façon（以後DTFと略記）を研究対象として取り挙げ，その機能を実証的に明らかにし，包括的説明を目指してきた。これらATやDTFを考察する際，主要な仏語辞書では，これらの意味としてquoi qu'il en soit（以下QQSと略記）が提示されていた[1]。このQQSは« quelle que soit la chose que »を意味するquoi que[2]と非人称il，漠然とした中性代名詞en，動詞êtreから構成される節構造をなしている。このことから，DTFやATと同列に並ぶものかどうかは議論の余地のあるところではあるが，辞書でも成句として取り上げられており，類似した連結詞間の相違点把握のためにも，本稿ではこのQQSを研究対象とする。

なお，QQSの意味に関しては，これを構成するquoi queの意味「～は何であれ」を含んでいるということは否定できないと思われるので，「それは何であれ」という意味であるという前提で論を進める[3]。

従って，本稿の目的は，QQSのenが具体的には何を指示しているのか確認しながら，談話

レベルでQQSを終止･復帰の観点から捉え直すことを試み，QQSの機能を把握することである。

本論に入る前に，分析に当たって前提となる筆者の考え方を２点挙げておく。

①同一言語共同体に属する人間は，具体的かつ詳細な限定された特定の文脈や状況下においては，同じ経験則を想起・適用する蓋然性が高い。

②連結詞は，まず第一に話し手（書き手）の思考の整理手段である。

2. 先行研究

まずQQSの辞書による定義を確認する。*Dictionnaire du français contemporain*が「現在の状況による支障にもかかわらず」，*Logos*が「状況が何であろうと」と定義付け，*Le Grand Robert*が次節で見るLe Bidoisを引用している他は，主要な辞書では詳細は見当たらない。これらの記述から，何らかの譲歩を表しているものとみなされる。

また，*Le Bon Usage*（§1149）では，「« peu importe »（どうでもいい）という意味を持ち，動詞の時制に関してもほとんど決まっている一種副詞的成句である」と記述されている。

2.1. Le Bidois (1968)，Cellard(1996)，Morel (1996)

Le Bidois (1968 : T1 : 337)によると，「QQSは暫定的な譲歩を表す。より正確には，今言われたばかりのことの真実性に関して，話し手が（実際にしろ見せかけにしろ）無関心であることを示す」。

この「無関心(l'indifférence)」に関してはCellard(1996:18)でも「起こりうる事態に対する無関心を示す」となっている。

Le Bidoisと類似の考え方をしているのがMorelである。Morelは，まず，想起されるクラスに入る要素のどの要素を選択しても発話が真であることは維持されるという特徴を持つconcessives à choix aléatoire(偶然による選択の譲歩)という枠組みに，QQSを入れる。そして，Morel(1996:126)で「QQSは，今言われたばかりのことの妥当性についての議論はしたくないということと，何れにしてもその言われたことはこれから言うことには影響を与えないということを示すために用いられる」と指摘している。

上記Le BidoisとMorelによると，QQSのenは「言われたばかりのこと」である。但し，そのen「今言われたばかりのこと」はQQSに先行する明示的発話なのかどうか，あるいは非明示の推意をも含めるのか，あるいは両方であるのか，また，明示的発話であるとするならば，どの範囲までを含めるのかなどは，QQSの機能を検討する中で考察したい。

2.2. Nϕjgaard

Nϕjgaardは，フランス語の副詞や副詞的表現の機能を網羅的に記述し分類している。その中で，QQSを対立関係を表すものの中に分類し，更に遡及的譲歩を表すものとして，toujours est-

il que, en tout cas, DTF と同じ下位分類に入れている。そして，次の例文(1)を挙げながら，QQS は談話の中では先行発話よりもより関与的で重要な情報を導入するとしている[4]。なお，en の指示対象については言及されていない。

(1) On cherchait en vain le philosophe norvégien. Une colique l'avait-il saisi ? Avait-il eu peur de manquer le train? Un aéroplane était-il venu le chercher? Quoi qu'il en soit, il avait disparu sans qu'on eût le temps de s'en apercevoir, comme un Dieu. (Tome1, p.486, sic)[5]

2.3. Rossari (1997,2000,2002)

Rossari の連結詞に関する一連の研究は，特に QQS に関しては修正を重ね，2002での主張がひとまず最終見解であると思われる。しかし，1997で言及されている内容には無視できない点もあるので，1997についても(i)(ii)(iii)として触れておく。

(i) QQS が遡及的に参照し再検討するのは，先行発話で述べられている明確な事態 X であり，問題視されるのはその明確な事態 X の関与性・有効性であるとする。そして，事態 X を問題視することは，聞き手に QQS の後に導入されている事態のみが関心に値することであると指摘する効果を生む，としている。(p.91 et passim)

(ii) 事態 X を参照する原因は，QQS を構成する照応の代名詞 en の存在にある。(p.91)

(iii) QQS は二者択一の譲歩表現から来ているとし，en の潜在的な指示対象を復元すると「Que l'état de chose X soit ou que l'état de chose X ne soit pas, q」（事態 X がそうであろうとそうでなかろうと，後続発話 q の真実性は変わらない）であるとしている。(p.104)

上記(i)は，2000以降，後述の②に修正されている。聞き手への効果についてはその後言及されていない。上記(ii)(iii)の en の指示対象および譲歩との関連については2000以降全く言及されておらず，考察の対象から外れている。これは，QQS によって問題視されるものが「事態 X の関与性」から「含意」に修正されたためだと推察される。

Rossari(2000, 2002) の QQS についてのポイントを纏めると以下①②③の様になる。

① X の発話行為による含意 r を Y の含意 non-r に置換する操作が想定可能な場合，QQS の使用は適切である[6]。（2002:290）

② QQS によって遡及的に再検討されるのは，先行発話 X の命題そのものではなく，命題から推論される含意である。(2000:95, 2002:291)

③先行発話 X と後続発話 Y が同じ論証的方向性を持っている場合には，QQS は用いられない。(2000: 97 et passim)

以下，Rossari が引用する例文を挙げる。

(2a) Cet appartement est cher. <u>Quoi qu'il en soit</u> j'ai l'argent. (2000:95, 2002:288)

(2b) ??Cet appartement est cher. Quoi qu'il en soit il est beau. (2000:95, 2002:290)

その説明によると，例(2a)では，発話X「このアパートは高い」は「話し手はこのアパートを買うことができない」という含意 r を持つ。ところが，発話Y「お金がある」によって，高価なことはもはや購買の障害とは考えられなくなり，含意rを「話し手はこのアパートを買うことができる」というnon-rに置換可能となる。よって，QQSの使用は適切である。つまり，QQSによって，Xによる含意 r が問題視されることになる。

一方，例(2b)ではこのような置換操作が想定できないのでQQSが不適切となる，としている。つまり，Y「このアパートは綺麗だ」が示されても，高価なことが購買の障害となり続けるので，含意r「このアパートを買うことができない」をnon-r「このアパートを買うことができる」に置換する操作が可能ではなく，含意rは有効なままであり，(2b)は不自然となる。

そして，QQSの置換操作（含意rをnon-rに置換する）とMAISの論証行為（論拠Xからの結論rよりもYからのnon-rの方が強い）の対比から，RossariはQQSとMAISが似て非なるものであると指摘する。r がnon-rよりも弱いということは，non-rのためにrを取り消すことにはならない。QQSでは含意rが取り消されnon-rに置換されるが，MAISでは，non-rがrよりも強いだけでrが維持されている。従って，次の例文(3)のようにQQSを用いると含意rを再導入するような発話を連鎖することはできないが，MAISを用いれば容認されるとしている。(2002:292)

(3) ??Cet appartement est cher. Quoi qu'il en soit j'ai l'argent. Et malheureusement je ne peux pas l'acheter. （2002:292, 下線部QQSをMaisに換入すれば容認される[7]。）

以上，RossariのQQSに関する一連の研究を概観したが，1997ではenを事態Xと捉えていたが，2000以降の検討を辿ると，enの指示対象を含意に訂正しているのではないかと推察される。quoi queという譲歩表現とQQSの置換操作との関連性は不明である。また，2002でQQSは含意rをnon-rに置換する操作が想定されると主張しているが，先行発話からの含意rと後続発話からの含意non-rが明らかに反対の含意であるのかどうかという点については疑問であり，具体的文脈の中で考察しなければならない。

3. 分析

分析結果を先取りすると，QQSを構成するenは「『Pが答えの１つとなる問い』のテーマ」であり，QQSは停滞[8]と考えられる談話を終止し，前の談話に復帰する機能を担っているという見解に至った。

この分析結果に至った各例文の分析手順[9]は次の通りである。まず，連結詞はそれに先行する明示的発話と後続する明示的発話を直接つなげ関係づけているとは限らず，先行発話からの

推意αを介して前後を関係づけている場合があるので，推意αおよび推意βを把握し，αとβの関係を確認する。次に，αの介入の必然性の有無を確認し，QQSの「en」の具体的内容を検討する。次に，談話展開の中でQQSの出現する位置を考察する。最後にQQSの持つ具体的意味とQQSの出現位置との関係からその機能を導く。今回７例文それぞれについてこの手順に従って分析を行い，各例文の分析結果を網羅的に検討した。

分析を進めるに当っては，ATやDTFで行ったのと同様，以下の道具を用いているので[10]，それぞれの定義付けと共に本稿での「停滞」「復帰」の定義付けを合わせて行っておく。経験則や推意を用いる意義や詳細については，川北(2004)を参照して頂きたい。

C=QQSに至るまでの先行文脈および言語外情報[11]。

P=QQSの直前の先行発話Xの表意。「発話」とは具体的状況の下で使用され、その状況下で具体的意味を持つ基本的に１述語動詞を含む文に相当する。１発話（思考）Xは，それに先行する発話（思考）を受けて連鎖しているものなので，先行談話や文脈，発話状況や言語外情報などXに至るまでの全ての流れを背景としてなされるものである。従って，あるXの表意Pは，発話状況・言語外情報など当該発話に至るまでの全先行文脈ないし全先行談話を考慮して，指示対象の同定・省略表現の補足を行って特定される。

RE1=Xに至るまでの全文脈を背景にして，PまたはPに密接に関連する事象に適用される経験則[12]。適用される経験則は，Pのみを観察したとしても特定できない。当該文脈・Pに至るまでの流れ全体を考慮に入れた場合にのみ特定可能となる。もしXに至るまでの文脈が変化すると，たとえXが同じ要素連続であったとしても，当然異なる経験則が適用される。経験則は特別な大それたものではなく，通常は無意識のうちに自然に想起され適用されてしまうものである。人は，何かを思いついたり口にしたり聞いたりした際に，その何かに経験則が適用され，何らかの結論（本論文での「推意」）が引き出される。経験則とは，経験・伝聞・学習等によって得た事象であり，法則的･当為的･信念的なものがあり，一般常識･一般知識･諺・慣習・道徳・迷信などもこれに属する。思考あるいは発話の主体は，自然に思考・発話を経験則に照らし合わせて[13]，思考を整理しながら，思考を積み重ねていく。経験則は無数にあるが，具体的かつ詳細な特定の文脈あるいは言語外情報が与えられれば，我々は特定の経験則を想起し，同じ結論に至る蓋然性は高まる。本論文で言うならば，コーパスとして与えられた文脈の中に自分が置かれ連結詞を使う立場になると仮定するならば，コーパス上の実際の立場の者と自分が同じ経験則や言語外情報を共有する蓋然性が高まる。ひいてはこの経験則の適用から導き出される具体的推意の範囲も限定されると考えられる[14]。

α=RE1のPまたはPに密接に関連する事象への適用により導き出された推意[15]。

Q=QQSの直後の後続発話Yの表意。

RE2=QまたはQに密接に関連する事象に適用される経験則。

β=RE2のQまたはQに密接に関連する事象への適用により導き出された推意。

停滞＝あるテーマを持つ談話Ａが進行している中で，その談話Ａに付随して別の視点からの談話Ｂが導入され，談話Ａの進行を一旦滞らせるという意味で，「停滞」と呼ぶ。

復帰＝談話Ａの進行中に，一旦談話Ｂが導入され，談話Ａの進行に停滞を及ぼすが，その談話Ｂが終止され，再び談話Ａに戻るという意味で，「復帰」と呼ぶ。

3.1. 実例分析

(1) (C'est le journal de Jeanie.)

J'ai décidé que ce journal servirait de témoignage. Je vais noter tout ce qui se passe. Jusqu'à ce que je puisse coincer ce fils de p... Non, plus de gros mots, du chic et du bon genre : Jeanie, ma fille, t'es promue Sherlock Holmes, et pour commencer t'arrêtes de fumer comme un pompier.

Donc, surveiller Karen. Il n'osera pas si je traîne toujours par là. Il osera juste me foutre le feu peut-être, si je suis trop moche pour le tournevis. Quoi qu'il en soit, je verrai celui qui lui tournera autour.

Je me demande...si c'était une blague ? Non. Le journal n'a parlé du meurtre de Demburry que le lendemain de leur retour et, moi, j'avais déjà lu ses notes à ce sujet. J'ai envie de m'acheter un flingue. Il y a du bruit dans le jardin. Je vais voir. (*QF*; p.26)

Ｃ＝殺人者の日記を読んだ家政婦ジニーは，犯人が誰であるかを突き止めるため，出来事を全て日記に記そうと決める。そして，次のターゲットは，隣人カレンであると察知し，カレンを守るための策を考え，カレンを常に見守ることにする。もし自分が常にカレンの近くに居れば，殺人者もカレンに手を出せない。そうすれば，殺人者はカレンを守ろうとする自分の方に火をつけて殺そうとするかもしれないと思う。

Ｐ＝殺人者はジニーがドライバーで殺すにはあまりにもブ女であると考えジニーに火をつけるかもしれない。（←X = Il osera juste me foutre le feu peut-être, si je suis trop moche pour le tournevis.）

Ｑ＝ジニーは，誰がカレンの周りをうろつくかみてみようと思う。（←Y = je verrai celui qui lui tournera autour.）

上記Ｃを踏まえると，ジニーはカレンを見守ることに決めるが，その行為による殺人者の行動を予想する。一方で，カレンには手を出さなくなるということ，他方でジニー自身を殺そうとするかもしれないという，この予想される２つの行動は，ジニーにとって，カレンを守ることはできるけれども同時に自分自身が狙われる羽目になるという意味で，「カレンを見守ること」と「人を見守ることで逆に自分が危険に晒されること」という，拮抗する要素である。これらの要素は，Pが明示されることで明らかになる。このように限定された文脈において，Pと同時に特定の経験則RE1が想起され，Pに適用され推意αが導かれる。次に，Qと同時に経験則RE2が想起され，これがQに適用され，推意βが得られる。

RE1＝複数の要素が拮抗する場合は，何れの要素もありうる。

α＝ジニーには殺人者の行動がどうなるかわからない。

RE2＝殺人者のターゲットの周りを誰がうろつくか見れば，誰が犯人か分かる。

β＝ジニーは誰が犯人か分かる。

この例において，αとβの関係は同一でも矛盾でもないことが確認される。

では，PとQの関係づけにαが関与するかどうかを検討する。ここで「PとQの関係づけ」と記しているのは，Pはあくまでも Pまでの全文脈を受けているので，実際は「Pまでの流れを背景にしたPとQの関係づけ」のことであることに注意されたい[16]。

まず，αを介してPとQを関係づけると，「P。ジニーには殺人者の行動がどうなるかわからない。QQS（それが何であろうと）Q。」（下線部はα）となる。このようにαを介すると「どうなるかわからない」という不確定な状態に止まり，それ以上の限定化をせずにQQSに移行していることから，「それが何であろうと」の「それ」は「殺人者の行動」であり，QQSは「殺人者の行動が何であろうと」と解釈される。

次に，αを介さずにPとQの関係を見ると，「P。QQS（それが何であろうと）Q。」となり，P自体が「殺人者の行動」内容であることから，αを介さずとも「それ」は「殺人者の行動」であり，QQSは「殺人者の行動が何であろうと」と解釈可能となる。

以上より，何れの場合も「それ」は「殺人者の行動」と解釈可能である。従って，PとQの関係づけにはαをわざわざ介入させる必然性はないであろう。

では，この「殺人者の行動が何であろうとQ」とは，どのような意味を持つか。これは，「『殺人者の行動』の外延となる具体的内容には複数の可能性があるが，どの任意の具体的内容をとってもQ」，ということである。言い換えれば，「『殺人者の行動は何か』という問いに対する答えは様々に想定可能であるが，その答えが何れであっても変りなくQ」ということである。この問いのテーマは，「殺人者の行動」であり，Pは，この問い「殺人者の行動は何か」に対する答えの１つとなっている。

答え，即ち，具体的な殺人者の行動内容は，潜在的には様々に想定可能であるが，実際は限定された文脈の中におかれるので，想定可能なものは限られており，多くの場合においては，明示されているものに限られるであろう。この例では，PおよびPの直前の発話Il n'osera pas ～ par là.がそれに相当する。

Qとの関係でQQSを捉えると，QQSはその想定可能な殺人者の行動内容についての言及を打ち切り，それ以上このテーマを問題にせず，Qを提示していると言える。

では，このP，QQS，Qが，談話展開の中でどのように関わっているかを考察する。

まず引用箇所の冒頭からDonc, surveiller Karen.（カレンを見守ることにする）までジニーの決意や今後の行動が書かれている。次のIl n'oseraからQQSまで，ジニーがカレンを見守った場合の殺人者の行動が記されている。そしてその行動の記述はQQSで終止し，Qは再びジニーの

行動・決断に戻っている。この談話の流れから，QQSを境に談話の流れに復帰が生じていると観察される。「復帰」とは，「ジニーの決意や行動」をテーマにする談話の中に，その談話に付随し別の視点に基づいた「殺人者の行動」をテーマに持つ談話が一旦導入されるが，QQSを境にその談話が終止され，再び前の談話「ジニーの決意や行動」に戻る，ということである。仮に引用箇所においてテーマ「殺人者の行動」を持つ談話とQQSを省略すれば，Donc, surveiller Karen. Je verrai celui qui lui tournera autour.（じゃあ，カレンを見守ることにしよう。誰がカレンの周りをうろつくか見てやるわ。）となってしまうが，談話の整合性には問題が生じない。このことは，「殺人者の行動」をテーマに持つ談話が「ジニーの行動・決断」というテーマを持つ談話進行を停滞させている，ということに矛盾しないであろう。

このように，QQSが，談話進行を一旦停滞させた談話を終止し，前の談話へ復帰するという位置で出現するということは，QQSがこの復帰の役割を担っていると仮定できる。

P，QQS，Qだけを観察すると，「『Pが答えの１つとなる問い』のテーマ」を持つ談話の終止という面しか見えてこないが，より広い談話の流れを俯瞰すると，終止と復帰という面が認められる。

以上から，例(1)は以下のように纏められる。

en（それ）＝殺人者の行動＝「Pが答えの１つとなる問い」のテーマ。

Pが答えの１つとなる問い＝殺人者の行動は何か。

「P QQS Q」のパラフレーズ＝「殺人者はジニーがドライバーで殺すにはあまりにもブ女であると考えジニーに火をつけるかもしれない。殺人者の行動が何であろうと，（殺人者の具体的行動内容如何に関わらず，少なくとも言えることは）ジニーは，誰がカレンの周りをうろつくかみてみようと思う（ということである）。」

(2) (C'est le journal de Jeanie.)

Les garçons ne sont pas là. Je suis allée dans leurs chambres et j'ai fouillé dans leurs papiers. L'écriture des notes ne correspond pas. Je ne comprends pas. J'ai bien regardé, mais aucune de leurs écritures ne colle. Il doit déguiser la sienne quand il écrit.

Je me sens mieux parce que j'ai acheté le flingue à Joe, ça m'a coûté les deux tiers de ma paye, mais il est chargé, sous mon oreiller. J'ai aussi acheté un bouquin de psychologie, c'est difficile à lire, c'est pour les gens instruits. Quoi qu'il en soit, je vais en lire un chapitre ou deux, ça m'aidera peut-être. Maintenant, petit salopard, je suis prête à t'affronter.

...

Ce bouquin est passionnant. Je viens d'apprendre que les dingos ont parfois deux personnalités, ça veut dire qu'ils ont deux personnes dans leur tête, sans que l'un sache que l'autre existe. (...) (*QF*; p.38)

C＝ジニーは，殺人者の日記から，自分が日記を盗み読みしているのではないかと殺人者に疑われていると知った。息子達がいない時，息子達のノートの筆跡を確認するが殺人者の日記とは一致しない。貧乏で学が無く本を読む習慣の無いジニーであるが，身の安全のために拳銃と，異常者の心理をつかむために心理学の本をわざわざ街まで買いに行った。しかし，すぐにその本が難解であることがわかる。

P＝ジニーの買った本は学のある人向けの本である。（←X = c'est pour les gens instruits）

Q＝ジニーは１章か２章読むことにする。（←Y = je vais en lire un chapitre ou deux,）

上記Cを踏まえると，ジニーは異常者の心理をつかむという目的のために本を買ったが，その本が難解で学のある人向けの本であるとわかる。この「目的のために本を読もう」という意気込みと「目的のためには自分にはレベルの高すぎる本を読まなければならない」という現実との対立がPおよびPの直前の発話で判明する。この対立は拮抗する要素であるので，Pと同時に特定の経験則RE1が想起され，Pに適用され，推意αが得られる。Qと同時に特定の経験則RE2が想起され，Qに適用され，推意βが得られる。

RE1＝複数の要素が拮抗する場合は，何れの要素もありうる。

α＝ジニーは（目的達成のために買った本を）どうすべきかわからない。

RE2＝少し読むならば，少し役立つかもしれない[17]。

β＝少し役立つかもしれない。

この例(2)においても，αとβの関係は同一でも矛盾でもないと確認される。

では，PとQの関係づけにαが関与するかどうかを検討する。

まずαを介すると「P。<u>ジニーは（目的達成のために買った本を）どうすべきかわからない。</u>QQS（それが何であろうと）Q」（下線部はα）となる。このようにαを介すると「どうすべきかわからない」という不確定な状態に止まったまま保留し，QQSに移行していることから，「難解で自分のレベルとは違いすぎる本である。読むか諦めるかどうすべきかわからない。どうすべきかを考えないで（どうすべきかという問題は保留し），買った本がどのようなものであっても，少なくとも１章か２章読む」という解釈が可能となる。よって，「それが何であろうと」の「それ」は「買った本」と解することができる。

一方，αを介さない場合，P自体が「買った本」がどのようなものかという具体的内容であることから，「それ」とは「買った本」と解することが十分可能である。

以上から，PとQの関係づけは，何れの場合も「それ」は「買った本」となり，αを介さないでも十分理解可能であるので，αの介入の必然性はないと言える。

「買った本が何であろうとQ」とは，「「買った本」の性質や印象に関する具体的内容如何に関わらず，何れの場合でもQ」，言い換えれば「『買った本はどのようなものか』という問いに対する答えは様々に想定可能であろうが，その想定可能な答えの何れであっても変らずQ」という意味である。このことから，想定可能な答えの何れであるかは，Qとの関係では重要では

なくなるということにつながる。当該問いのテーマは「買った本」であり，具体的答えとなる要素には，明示部分に限れば，Pの直前の発話c'est difficile à lireも含まれる。Pは当該問いの答えの１つとなっている。

では，この例での談話展開はどのようなものであろうか。

Je me sens mieux(気分がいい)から展開を観察すると，j'ai acheté le flingue (銃を買った)，ça m'a coûté(購入にはお金がかかった)，il est chargé, sous mon oreiller.(弾を詰めて枕の下に置いてある)，J'ai aussi acheté (も買った)まで，主体（ジニー）が積極的に関わる能動的行為である。一方，P及びPの直前の発話c'est difficile à lire（本が難解である）は「買った本」の性質である。そしてQQSを境に，Qで再びje vais en lire(読むことにする)という能動的行為となる。この流れから，「買った本」というテーマを持つ談話は談話進行を停滞させる談話と見なすことができ，Qはそのテーマを持つ談話を飛ばして前の談話（ジニーの行為）に戻っていると考えることができよう。

この例でも，QQSが，停滞を招く談話を終止し，前の談話に戻るという復帰の位置に出現していることから，QQSがこの復帰の役割を担っていると考えられる。

以上より，例(2)は以下のように纏められる。

en（それ）＝買った本＝「Pが答えの１つとなる問い」のテーマ。

Pが答えの１つとなる問い＝買った本はどのようなものか。

「P QQS Q」のパラフレーズ＝「ジニーの買った本は学のある人向けの本である。買った本がどのようなものであろうと，（買った本の性質如何に関わらず，少なくとも言えることは）ジニーは１章か２章読むことにする（ということである）。」

(3) (C'est l'épilogue du roman.)

Le docteur Smith reprit:

-Voyez-vous, quand sa mère s'est rendu compte qu'il était anormal, après le meurtre de cette petite fille brûlée vive et autres bricoles particulièrement sadiques, elle a décidé de le cacher avant qu'il ne se fasse prendre et reléguer toute sa vie dans un asile. Elle était prête à tout pour le protéger, peut-être parce qu'il avait failli mourir en venant au monde? Quoi qu'il en soit, ils ont manigancé le faux accident du lac: le corps était censé être irrécupérable avant la fonte et, à la fonte, on a prétendu qu'il avait été entraîné par des courants. Mais, tout cela, la fille Morgan l'ignorait. Ils ont enterré un cercueil vide et Zack a commencé sa vie cachée. (*QF*; p. 238)

C＝ジニー･モーガンは殺され，５人の息子のうちの１人が本当の殺人者であることが判明し，両親は自殺し，残された4人の息子たちは，ザックの犯罪行為は知らなかったと主張している。スミス博士が事件の真相を話す。母親は息子が異常であると気付いた時，彼を隠そう

と決心し，隠れ部屋に住まわせた。母親は息子を守るためにどんなことでもする気でいた。

P =（母親が息子ザックを守るためにどんなことでもする気でいた理由は，）ひょっとしたらザックが分娩時に死に瀕した子供だったからかもしれない。（←X = peut-être parce qu'il avait failli mourir en venant au monde?）

Q =マーチ家の人々は湖の事故を捏造した。（←Y = ils ont manigancé le faux accident du lac:）

Pはその直前の発話「母親は息子を守るため何でもする気でいた」の理由づけである。その理由がpeut-être ～？という単なる可能性を示す表現になっていることから，話し手（スミス博士）がP以外の他の理由も予想可能であると思いつつも，１つの可能性を述べたことを示している。「不憫な子（＝分娩時に死に瀕した子）だから」という可能性以外に，例えば「子を守る親の本能から」という他の理由が存在するということを示している。潜在的に拮抗する要素として，他の理由の存在が想定可能であるということである。しかし，母親が自殺している今となってはその理由を問い質す術はない。そこで，不確かな理由付けPと同時に特定の経験則RE1が想起され，Pに適用され，推意αが得られる。Qと同時に特定の経験則RE2が想起され，Qに適用され，推意βが得られる。また，αとβは同一でも矛盾でもないことが確認される。

RE1=複数の要素が拮抗する場合は，何れの要素の選択もありうる。

α＝本当の理由はわからない。

RE2=事故を捏造することは，間違っている。

β＝マーチ家の人々は間違いを犯した。

まずαを介してPとQの関係づけをみると，「P。本当の理由は分からない。QQS（それが何であろうと）Q」（下線部はα）となる。このようにαを介すると「本当の理由はわからない」という不確定な状態に止まったまま，QQSに移行していることから，「本当の理由はわからない。本当の理由はこれ以上考えないで（本当の理由はさておき），Q」というような解釈となり，「それ」とは「本当の理由」と仮定できる。

一方，αを介さずPとQの関係をみると「P。QQS（それが何であろうと）Q。」となり，P自体が「本当の理由」内容であることから，「それ」とは「本当の理由」であると解釈可能である。

これらのことから，何れの場合でも「それ」は「本当の理由」と解され，αの介入をさせないでも関係づけが十分可能であることから，αの介入の必然性はない。

「本当の理由」とは，上述のように，明示されているPと，そのPの表現自体から予想される他の理由である。これらの想定可能な理由が「本当の理由」をテーマとする問い「本当の理由は何か」に対する答えである。Pはその問いに対する答えの１つであると言える。理由内容，すなわち問いに対する答えがどのようなものであっても，その答え如何に関わりなくQという事実が提示されている。

では，QQSの前後で談話がどのように展開されているかを見てみよう。

スミス博士の話は，Voyez-vousからPの直前のprotégerまで，異常な息子に気づいた母親の決意となっている。他方，Pはその母親の決意に対するスミス博士自身による理由付けである。そして，QQSが出現し，Qはマーチ家の人々の取った行動である。Voyez-vousから全てスミス博士の言葉ではあるが，母親の決意とマーチ家の人々の取った行動は，マーチ家の事件の真相に属するものであるのに対して，Pはその事件真相に対するスミス博士自身の憶測である。このPは，「事件真相」というテーマを持つ談話の中に，それに付随して出てきた「本当の理由」をテーマに持つ発話であり，このPの導入によりその事件真相の流れが一旦停滞してしまう。そこで，QQSによって，Pという停滞を及ぼした発話を終止して，本筋（事件真相）に戻ることが可能になる。つまり，この例においてもQQSは復帰の役割を担っていると言えよう。この例では，Pは明示的には１発話であるが，Pの表現自体からPと同じテーマを持つ発話が想定可能であるので，Pはその想定可能な発話と共に「本当の理由」をテーマとする談話を構成していると言えよう。

以上より，例(3)は以下のように纏められる。

en（それ）＝本当の理由＝「Ｐが答えの１つとなる問い」のテーマ。

Ｐが答えの１つとなる問い＝本当の理由は何か。

「P QQS Q」のパラフレーズ＝「（母親が息子ザックを守るためにどんなことでもする気でいた理由は，）ひょっとしたらザックが分娩時に死に瀕した子供だったからかもしれない。本当の理由が何であろうと，（本当の理由内容如何に関わらず，少なくとも言えることは）マーチ家の人々は湖の事故を捏造した（ということである）。」

(4) Parfois David se demandait si Mokes était réellement dupe de cet imaginaire adolescent ou s'il avait trouvé là un moyen commode pour assurer son ascendant sur Pinto et Bushey. Mokes parlait peu, mais peut-être s'agissait-il encore d'un simple calcul destiné à épaissir son aura de chef.

Quoi qu'il en soit, le groupe se déplaçait beaucoup, voyageant sur tous les toits accessibles. En raison de sa maladresse, David ne pouvait pas les accompagner dans certains de leurs périples qui réclamaient de véritables dispositions acrobatiques, et chaque fois qu'il les voyait s'éloigner entre les cheminées, il se sentait dans la peau d'un matelot abandonné sur une île déserte. (*CM*; p.80)

Ｃ＝浮浪者となったダヴィッドは街で知り合った浮浪者ジギーとビルの屋上に上り，そこで生活を始める。まもなく既に屋上で暮らしていたボスのモークス，手下のピント，ビュッシーの３人と出会うが，運動神経の鈍いダヴィッドはなかなか仲間であるとは認めてもらえない。認めてもらうため，ダヴィッドは得意とする作り話をし，皆に聞かせる。その話とは，３人を登場人物とし，彼らがビルの屋上で自由に暮らす英雄となる想像上の世界の物語である。3人はダヴィッドの話に聞き入る。ダヴィッドは，モークスが自分の想像上の話に本

当に騙されているのか，あるいは手下に支配力を与えるための手段をそこに見出したのかと自問した。モークスはほとんど話さなかった。

Ｐ＝（モークスがほとんど話さなかった理由は，）ボスとしてのオーラを高めるための単なる計算だったのかもしれない。(←X= peut-être s'agissait-il encore d'un simple calcul destiné à épaissir son aura de chef.)

Ｑ＝３人は近づくことのできる屋根という屋根へ移動を繰り返した。(←Y= le groupe se déplaçait beaucoup, voyageant sur tous les toits accessibles.)

Pはその直前の発話「モークスはほとんど話さなかった」の一種理由づけであるが，それがpeut-êtreという単なる可能性を示す表現になっていることから，P以外の他の理由（例えば，「本人の生来の性格から」）も潜在的に可能であり，その複数の理由が拮抗していることを示している。従って，例(3)と同様，以下のようになる。なお，αとβの関係は同一でも矛盾でもない。

RE1=複数の要素が拮抗する場合は，何れの要素の選択もありうる。

α＝本当の理由は分からない。

RE2=屋根から屋根へと渡るのは，勇気と運動神経が要求される。

β＝グループの３人は，勇気があり運動神経が良い。

PとQの関係づけも，例(3)同様，P自体が「本当の理由」内容であることから，αを介さず「「P。QQS（本当の理由が何であろうと）Q。」と関係づけることができるので，αの介入の必然性は無いと言えよう。

「本当の理由が何であれQ」とは，「「本当の理由」として想定可能な理由内容如何に関わらず，何れの場合でもQ」という意味，言い換えれば「『本当の理由は何か』という問いに対する答えは様々に想定可能であるが，その想定可能な答えが何れであっても変らずQ」という意味である。この問いのテーマは「本当の理由」であり，Pがその問いに対する答えの１つとなっている。

では，談話展開を観察する。

まず，QQSの復帰の役割は，QQSの前後で段落が変わっていることからも理解される。実際，引用箇所の1つ目の段落を細分すると，ダヴィッドが自問したという事実とモークスが無口であったという事実と，その事実に対する理由づけから構成されている。他方，QQSから始まる2つ目の段落は，ダヴィッドの作り話とは全く無関係であり，グループの行動とそれに対するダヴィッドの対応という事実から構成されている。ところが，これらの事実は全て作者による登場人物（ダヴィッド，モークス，グループ）の客観描写となっており，P（理由付け）のみが登場人物ダヴィッドの思考を借りた作者自身の声・思考であり，自由間接話法で表現されていると解される。つまり，作者の客観描写による事実の談話の流れがPという作者自身の声（登場人物の思考）の挿入によって停滞する。そこで，QQSがその停滞を及ぼしたPを終止し，前の談話の流れ（事実・作者による登場人物の客観描写）に戻していると考えられる。

以上より，例(4)は以下のように纏められる。

en（それ）＝本当の理由＝「Pが答えの１つとなる問い」のテーマ。

Pが答えの１つとなる問い＝本当の理由は何か。

「P QQS Q」のパラフレーズ＝「（モークスがほとんど話さなかった理由は，）ボスとしてのオーラを高めるための単なる計算だったのかもしれない。本当の理由が何であろうと（本当の理由内容如何に関わらず，少なくとも言えることは），３人は近づくことのできる屋根という屋根へ移動を繰り返した（ということである。）」

(5) A Gênes, ils ont trouvé à se loger dans une auberge de la ville basse. Est-ce la curiosité de cette première escale étrangère, l'atmosphère de liesse crapuleuse des ruelles proches du port ? Quoi qu'il en soit, Alfred a renoué avec certaines de ses anciennes habitudes. Le premier soir, il est sorti seul. Le second, il n'est rentré qu'à l'aube et elle l'a guetté toute la nuit. Comme elle n'aime pas rester inactive, même dans les pires moments, elle en a profité pour écrire deux chapitres. (*LES*; p.136)

Ｃ＝作家アルフレッドは，気晴らしのため夜の街で遊ぶのが好きであった。文学談義で年上の女流作家ジョルジュと意気投合する。やがて二人は一緒に戯曲を書き始め，お互いの尊敬の念が恋にかわる。パリに連れて来ていたジョルジュの子供が夫に連れ帰られてしまったことや，親友の裏切り，批評家の辛辣な言葉，冬のパリの厳しい寒さ等からジョルジュはイタリア旅行を思いつき，二人はイタリア旅行に出かけることになる。マルセイユから船でイタリアに向かうが，最初の寄港地ジェノバに到着する。ジェノバで，宿屋に泊ることにする。

Ｐ＝異国における最初の寄港地への好奇心であったのか，あるいは港に近い路地のあやしい淫靡な雰囲気からだったのか。（←X = Est-ce la curiosité de cette première escale étrangère, l' atmosphère de liesse crapuleuse des ruelles proches du port ?）

Ｑ＝アルフレッドは，かつての悪い習慣を再び始めた。(←Y=Alfred a renoué avec certaines de ses anciennes habitudes.)

引用箇所の前は，マルセイユからジェノバに向かう船上での出来事の記述で，引用箇所からジェノバでの生活の記述が始まる。Pは，アルフレッドの悪癖再開を誘発する原因として選択的に２つ挙げられている疑問文になっていることから，この２つが拮抗していると考えられ，以下のようになる[18]。また，Qからはβが導かれるが，αとβは同一でも矛盾でもないことが確認される。

RE1=複数の要素が拮抗する場合は，何れの要素の選択もありうる。

α＝本当の誘因はわからない。

RE2=かつての悪い習慣に戻れば，新しい生活ができなくなる。

β＝二人は新しい生活ができなくなる。

PとQの関係づけは，今までの例と同様，P自体が「本当の誘因」内容であるとことから，αの介入が無くても「P。（アルフレッドの悪癖再開の）本当の誘因が何であろうとQ」と十分理解できる。従って，関係づけにはαの介入の必然性は無い。

「本当の誘因が何であれQ」とは「「本当の誘因」になりうる具体的内容如何に関わらず，どの誘因の場合でもQ」という意味，言い換えれば「『本当の誘因は何か』という問いに対する答えは様々に想定可能であるが，その答えが何れであっても変りなくQ」という意味である。この問いのテーマは「本当の誘因」であり，Pはこの問いに対する答えの１つとなっている。

この例の談話展開でも，QQSを境に前の談話への復帰が起こっていると観察される。Pの直前の発話A Gênes ～ basseは，出来事展開・作者による登場人物の客観描写である。PはQという出来事を引き起こす原因であり，その誘因は，作者自身の声・思考としてEst-ce ～？という疑問形で述べられていると解される。この２者択一的な誘因に対して，それ以上言及せず，どちらであるか特定せずに，QQSを境にQという出来事展開・登場人物の客観描写が再開している。従って，時間軸に沿った出来事展開・作者による登場人物の客観描写が，Pという作者自身の声によって停滞するが，QQSによってその停滞を及ぼした発話が終止され，再び前の談話に戻っていると考えられる。

以上より，例(5)は以下のように纏められる。

en（それ）＝本当の誘因＝「Pが答えの１つとなる問い」のテーマ。

Pが答えの１つとなる問い＝本当の誘因は何か。

「P　QQS　Q」のパラフレーズ＝「異国における最初の寄港地への好奇心であったのか，あるいは港に近い路地のあやしい淫靡な雰囲気からだったのか。本当の誘因は何であろうと（本当の誘因の内容如何に関わらず，少なくとも言えることは）アルフレッドは，かつての悪い習慣を再び始めた（ということである）。」

(6)　Marie n'en croit pas ses oreilles. Elle exige de son amie le récit détaillé de cette triste nuit, dont l'écho devait se transmettre à la postérité, de cette triste rencontre dont Mérimée dira, si galamment, qu'à son issue il a été tenté de laisser deux louis sur la commode...

Chacun mettra sur le compte de l'autre ce fiasco amoureux qui n'honore personne. Mérimée accusera chez sa conquête un mélange de gaucherie, d'ardeur factice et d'insensibilité physiologique. Sand évoquera à propos de son partenaire d'une nuit le spectre de l'impuissance.

Quoi qu'il en soit, Marie qui recueille l'aveu de cet échec n'en est que plus déterminée dans sa quête; seul un amant nouveau peut chasser le mauvais souvenir que vous en a laissé un autre. (*LES*; p.45)

C＝ジョルジュ･サンドは，夫を田舎に残し子供を連れてパリに出る。愛人サンドーと暮らすが，やがてサンドーとも別れた。ジョルジュと親友のマリーは毎日顔を合わせ，男の話等をし

ている。ある日，マリーはジョルジュに，社会的地位を確保するために，文学界で影響力のある知名度の高い男性を新たに愛人に持つよう勧める。ユゴー，デュマ等の名を挙げるが，ジョルジュは気を留めない。ところが，メリメの名を聞いて青ざめる。マリーが理由を問うと，一夜を試したがダメだったと言って，詳細を言う。この詳細が後に文学界で噂になる。その噂によると，ジョルジュとメリメはそれぞれがお互いの性的欠陥を指摘しているということである。

P＝ジョルジュ・サンドは，その夜のメリメについてぞっとするような性的不能者と言うことになる。（←X= Sand évoquera à propos de son partenaire d'une nuit le spectre de l'impuissance.）

Q＝その夜の失敗談を告白されたマリーは，愛人探しはより一層必要だと確信する。

(←Y=Marie qui recueille l'aveu de cet échec n'en est que plus déterminée dans sa quête)

QQSの前段落は，ジョルジュとメリメがお互いの欠陥を指摘しあっている内容であり，拮抗する要素（ジョルジュの言い分とメリメの言い分）が示されている。前段落の最後の発話P（Sand évoquera ～ l'impuissance）はその直前の発話（メリメの言い分）と対比して言及されており，Pの明示によってその拮抗する要素が明白となる。よって，Pと同時に特定のRE1が想起されPに適用され，αが導かれ，Qからもβが導かれ，以下のように考えられる。αとβは同一でも矛盾でもないことが確認される。

RE1=複数の要素が拮抗する場合は，何れの要素の選択もありうる。

α＝二人の言い分のどちらが正しいかはわからない。

RE2=ある行動を進める確信をすれば，一層その行動を取るようになる。

β＝マリーはジョルジュに愛人探しを一層強く進める。

では，PとQの関係づけを確認しておく。

αを介すると「P。二人の言い分のどちらが正しいかはわからない。QQS（それが何であれ）Q」（下線部はα）となり，不明確なαのままQQSに移行するという繋がりから，「それ」とは「二人の言い分」と解することができる。

一方，αを介さない場合「P。QQS（それが何であれ）Q」となり，Pは，Pの直前の発話（メリメの言い分）に連鎖している発話であり，P自体が「二人の言い分」の１内容であることから，「それ」とは「二人の言い分」と解することができる。

以上のことから，何れの場合でも，「それ」とは「二人の言い分」であると解釈でき，PとQの関係づけは，αを介入させないでも十分理解可能であるので，αの介入の必然性は無い。

では，「二人の言い分は何であろうとQ」はどういう意味を持つか。「「二人の言い分」としての具体的内容が色々想定可能であるが，どの具体的内容を取ってもQ」という意味，言い換えれば「『二人の言い分は何か』という問いに対する答えは様々であるが，何れの答えであっても変りなくQ」という意味である。この問いのテーマは「二人の言い分」であり，Pはこの問いに対する答えの１つとなっている。

では，談話展開を考察する。

引用箇所の１段落目では，マリーがジョルジュから失敗談を聞いて耳を疑い，その悲しい夜の経緯についての詳細を問い質すという展開である。２段落目は，問題の夜がどうであったかという談話である。３段落目は，QQSで始まり，問題の夜について打ち明けられたマリーの様子となる。１段落目と３段落目は，時間軸に沿った出来事展開であり，作者による登場人物マリーの客観描写である。他方，２段落目は単純未来形におかれていることから，２段落目全体（ジョルジュとメリメがお互いの欠陥を指摘する内容）が，将来文学界の他の人々が聞くことになるそれぞれの言い分として描写されており，打ち明けているマリーとそれを聞いているジョルジュが現在いる時間軸からは離れている。以上のことから，QQSが，別の時間枠で描写され導入された談話（２段落目全体の問題の夜の談話）を終止し，Qで，１段落目の現在のマリーの様子・行動という談話につなげている，即ち，前の談話（作者によるマリーの客観描写）に戻している，と考えることができる。このことは，QQSの復帰の役割に合致し，この復帰の役割は，QQSから別段落になっていることとも矛盾しない。この２段落目全体は，現在という時間軸にある談話進行に付随した，「二人の言い分」をテーマとする談話であり，談話進行を一旦停滞させていると考えられる。

以上から，例(6)は以下のように纏められる。

en（それ）＝二人の言い分＝「Pが答えの１つとなる問い」のテーマ。

Pが答えの１つとなる問い＝二人の言い分は何か。

「P　QQS　Q」のパラフレーズ＝「ジョルジュ・サンドは，その夜のメリメについてぞっとするような性的不能者と言うことになる。二人の言い分が何であろうと（二人の言い分の具体的内容如何に関わらず，少なくとも言えることは）その夜の失敗談を告白されたマリーは愛人探しはより一層必要だと確信する（ということである）。」

(7)　Si l'anatomie de Delahaye, si son comportement, son élocution confuse évoquent ainsi de la mauvaise herbe rétive, l'amie qui l'accompagne relève d'un autre style végétal. Prénommée Victoire et belle plante silencieuse à première vue, elle paraît plus sauvage qu'ornementale ou d'agrément, datura plutôt que mimosa, moins épanouie qu'épineuse, bref d'apparence pas très commode. Quoi qu'il en soit, Ferrer sait aussitôt qu'il ne va pas la perdre de vue: bien sûr, dit-il, entrez. Puis ne prêtant qu'une oreille distraite aux propos embrouillés de Delahaye il va tout faire pour, l'air de rien, se rendre intéressant auprès d'elle et croiser un maximum de ses regards. (*JMV* [19]; p.29)

Ｃ＝フェレールは，生来女好きである。気難しい妻スザンヌと別れ，その足で女友達ロランスのアパルトマンへ行き，そこで暮らしていた。ところが数ヵ月後追い出され，一人暮らしを始める。その後しばらくして，ギャラリーの投資顧問のドラエが一人の女性を連れてフェ

レールの所を訪れる。この来訪者二人が植物に譬えて形容される。この女性は，一見ひっそりとした美しい花のようだが，野性的でトゲを秘めている感じで，見た目あまり気安い感じではなかった。

P＝ヴィクトワールは，一見ひっそりとした美しい植物のようだが，観賞用と言うよりも野原で自生している感じで，ミモザというよりダチュラで，花開くというよりも刺のある感じで，一言で言うと，見た目あまり気安い感じの女性ではない。(←X= Prénommée Victoire ～ bref d'apparence pas très commode)

Q＝フェレールは，ヴィクトワールのことが忘れられなくなると，すぐに悟った。(←X = Ferrer sait aussitôt qu'il ne va pas la perdre de vue)

Pは，ヴィクトワールという女性が植物的に「一見ひっそりと美しい」という要素と「観賞用・ミモザ・花開くというよりも，野原で自生的・ダチュラ・棘を秘めている」という要素で形容されることを示している。このように，P自体が複数の拮抗する要素を含んでいる。また，Pは，ドラエの風貌が連想させる植物との対比で，述べられている。従って，上記のように限定された文脈においては，以下のようになろう。なお，αとβは同一でも矛盾でもないと確認される。

RE1=複数の要素が拮抗する場合は，何れの要素の選択もありうる。

α＝風貌をどのような植物に譬えるかはわからない。

RE2=ある女性が忘れられなくなるとすぐに悟るならば，その女性に惹かれたということ。

β＝フェレールは，ヴィクトワールに惹かれた。

では，PとQの関係づけを確認する。

αを介すると「P。風貌をどのような植物に譬えるかはわからない。QQS（それが何であれ）Q」（下線部はα）となり，αからQへの繋がりから，「それ」とは「植物に譬えられた風貌」（以後，「風貌」と略記）と解することができる。

一方，αを介さない場合「P。QQS（それが何であれ）Q」となり，Pがその前の発話（ドラエの風貌）に連鎖しており，P自体が「風貌」の具体的１内容であることから，αを介さない場合も，「それ」とは「風貌」と解することができる。

以上から，何れの場合でも，「それ」とは「風貌」であると解釈でき，PとQの関係づけは，αの介入をさせないでも理解できるので，αの介入の必然性は無い。

「風貌が何であれQ」とは，「「風貌」の外延となる具体的内容には複数の可能性があるが，任意の具体的要素をとっても変わりなくQ」という意味，言い換えれば「『風貌はどのようなものか』という問いに対する答えは種々想定可能であるが，その想定可能な答えが何れであっても変りなくQ」という意味である。この問いのテーマは，「風貌」であり，Pはこの問いに対する答えの１つとなっていると考えられる。

次に，談話展開がどのようになっているかを考察する。引用箇所の段落を段落③とすると，遡って段落①から段落③までの流れが問題になる。

段落①：フェレールが新しいアパルトマンで寛いでいると，ドラエがヴィクトワールを伴って不意に訪ねてくる。ドラエの[On peut entrer?]（入っても良いか？）という言葉で段落①が終わる。（時間軸に沿った出来事の展開がある。作者による登場人物の客観描写。）

段落②：植物を連想させる容姿を持つ人間の存在が指摘され，ドラエの風貌描写が植物に譬えて展開される。（時間軸に沿った出来事の展開はなく，背景と解釈される。）

段落③（引用箇所）：ドラエに対比させ，ヴィクトワールの風貌描写が植物に譬えて展開される。この描写がQQSまで続く。QQSを境にフェレールの反応（Q）に話が移り，段落①のドラエの[On peut entrer?]という質問に対するフェレールの返答[bien sûr, entrez.]になる。

このように，段落①の出来事展開と段落③QQSからの出来事展開の間，つまり段落②からQQSまでは出来事は時間軸に沿って展開されず，風貌描写となっている。この描写はQQSを境に終止し，Qからは前の出来事（来訪者の登場）に戻り，再度出来事が展開される。出来事展開の中でその展開（来訪者の登場）に付随し別の視点から述べられた談話（植物に譬えられた風貌描写）が一旦導入され，談話進行を停滞させるが，その停滞を及ぼす談話をQQSが終止し，Qで前の出来事に戻っている。この例からも，QQSの復帰の役割を認めることができる。

以上から，例(7)は以下のように纏められる。

en（それ）＝植物に譬えられた風貌＝「Pが答えの１つとなる問い」のテーマ。

Pが答えの１つとなる問い＝植物に譬えられた風貌はどのようなものか。

「P　QQS　Q」のパラフレーズ＝「ヴィクトワールは，一見ひっそりとした美しい植物のようだが，観賞用というよりも野原で自生している感じで，ミモザというよりダチュラで，花開くというよりも刺のある感じで，一言で言うと，見た目あまり気安い感じではない。植物に譬えられた風貌が何であろうと（風貌の具体的内容如何に関わらず，少なくとも言えることは），フェレールは，ヴィクトワールのことが忘れられなくなると，すぐに悟った（ということである）。」

3.2. 分析のまとめ

以上７例の分析結果を横断的に観察すると，以下①から⑥については全例に当てはまる。

①QQSを構成しているenは「『Pが答えの１つとなる問い』のテーマ」である。

②「『Pが答えの１つとなる問い』のテーマ」を持つ発話は，談話進行に停滞をもたらす談話を構成する。

当該テーマを持つ談話には当然P自体が入るが，実際には１発話とは限らず，明示的または非明示的に複数存在している，と考えられる。実際，例(1)(2)(6)(7)では，当該テーマの発話がP以外にも明示されている。例(3)(4)では明示的には１発話であるが，この発話がpeut-êtreを含んでいることから，同じテーマを持つ他の発話が潜在的に存在することが示されている。例(5)は１発話であるとはいえ，その発話自体が２つの拮抗する選択的要素を明示している

ので，同じテーマを持つ発話が２つ明示されていることと同じである。

③QQSは，停滞をもたらした談話を終止し，前の談話に復帰させる。

④Pの明示によって，複数の要素が拮抗することが判明する。

⑤Pの推意αは，「～はわからない」という内容である。αとβは同一でも矛盾でもない。

⑥PとQの関係づけには，推意αを介入させる必然性は無い。

次に，分析結果を通して，先行研究の見解を振り返ってみる。

(1)Le BidoisやMorelの「言われたばかりのことの真実性に無関心であること」や「妥当性を議論しないこと」とは，「言われたばかりのこと」が具体的には本稿でのPおよび「『Pが答えの１つとなる問い』のテーマ」を持つ発話に相当すると考えれば納得のいくものである。「『Pが答えの１つとなる問い』のテーマ」を持つ発話が１つの談話をなすことになるが，この談話の前後を俯瞰的に観察すると，この談話が本筋に停滞を及ぼす談話であり，QQSでその談話を終止することが，全ての例から理解された。このQQSでの終止は，「『Pが答えの１つとなる問い』に対する答えとなる具体的内容如何に関わらず，その何れの場合であってもQとなる」ということであり，このことは「真実性に無関心である」や「妥当性の議論をしない」ということと相容れると考えられる。

他方，Morelの「妥当性の議論をしても言われたばかりのことはこれから言われることには影響を与えない」ということは，本稿の分析から見ると，妥当性の議論の対象自体が停滞を及ぼすとみなしうる談話であり，QQSによってその談話が終止されQで再び前の談話に戻るので，これから言われること，即ちQに影響を与えないのは当然であると考える。

(2)Nϕjgaardの「先行発話よりも関与的で重要な情報を導入する」という点に関しては，本稿の観察では，Nϕjgaardの「先行発話」とは本稿での「『Pが答えの１つとなる問い』のテーマ」を持つ談話であり，後続発話Qは，この談話を飛ばして前の談話につながるので，談話全体の中ではQQSの後続発話Qがより関与的で重要であることと矛盾しない。そこで挙げられていた例文(1)は，３行のみのため，どのような文脈かは想像にすぎないが，本稿の分析に則って説明を試みると次のようになろう。冒頭の発話は「ノルウェーの哲学者を迎えに行ったが無駄であった」である。次のUne coliqueからchercher?までは，「ノルウェーの哲学者に会えなかった理由は何か」という問いに対する答えとして想定可能な具体的内容である。言い換えると「ノルウェーの哲学者に会えなかった理由」をテーマとする談話を構成していると考えられる。P（飛行機がノルウェーの哲学者を迎えに来たのか？）はその談話に属する１発話であることから，当該テーマは「『Pが答えの１つとなる問い』のテーマ」であり，「en」＝「理由」となる。従って，ここでのQQSは「理由は何であれ」となる。そしてQQSがその談話を終止し，Q（彼は神のように気付かれることもなく，居なくなってしまっていた）で，再び冒頭の発話に復帰している，と考えられる。３行全体の中では，冒頭の発話と

QQSの間に，テーマ「（ノルウェーの哲学者に会えなかった）理由」を持つ談話が導入され，一旦談話進行が停滞するが，QQSがこの停滞をさせた談話を終止し，Qで再び前の談話に復帰させている，と推察することができよう。

(3)Rossariの見解の「rからnon-rへの置換操作」は観察した範囲では見当たらなかった。そもそもRossariの含意rはどのように導かれたものなのか分析過程で全く明示されていないが，本稿での経験則に相当するものが無意識に働いた結果導き出されたものであると推察される。従って，そこでの含意rは本稿の推意αに相当するのでないかと解される。本稿の考察の中での推意αの内容は不明瞭な「わからない」であり，αとβは矛盾する事態となるようなものではなかった。これは，Rossariの含意すなわち本稿の推意なるものは，当該連結詞の前後の発話のみを観察していたのでは，到底見極めることができないものであり，たとえ分析者が文脈を想定して分析を行ったとしても，その推量には限界があることを示している。

以上から，QQSの機能として次を提示したい。

QQSの機能：

「enは，『Pが答えの１つとなる問い』のテーマである。QQSは停滞をもたらしている談話を終止し，前の談話に復帰するという，復帰の機能を担う。」

4. 終わりに

本稿では，QQSのenが具体的に何を指示しているのか確認し，QQSの機能を談話展開の中で考察した。その結果，上記の見解に至った。この見解は，参照した小説に出現する例全ての観察結果を網羅的に分析した結果であるが，僅か７例しかなかったため，今後更に実例を観察し分析結果を検証していかなければならない。また，QQSと譲歩の関係については，譲歩という観点から稿を改めて論じる必要があろう。類義語とされるDTFおよびATとの対比についても，紙幅の都合上稿を改めて論じることにしたい。

---

1 *Grand Larousse*や*Trésor*ではATの項でQQSが提示され，*Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne, Logos, Le Grand Robert, Dictionnaire du français langue étrangère, Dictionnaire du français contemporain*等ではDTFの項でQQSが提示されている。

2 *Dictionnaire Historique de la Langue française*(1993, T2:p.1694), *Grevisse*(1987), *Grand Larousse, Logos, Trésor.*

3 il en estは仏和辞典で「事情は～である」と訳されているが，仏語辞書では定義付けがされていないので，敢えてこの意味は取り入れなかった。

4 Nϕjgaard (Tome1: p.486 , Tome3: p.408)

5 引用文は原文のままであるが，１行目２つ目の発話のilはelleの誤植であろう。

6 Rossari(2000:96)で「le mécanisme de révision mobilise une opération de suppresssion et non une opération de substitution.(QQSの再検討のメカニズムは置換操作ではなく削除操作を働かせるものである)」と述べられていたが，この点はRossari(2002)で修正され，「削除操作」の部分は削除され，「l'opération de substituer 置換操作」とのみ記されている。

7 Rossariによる例文であるが，ネイティブチェックすると，maisに換入してもやや不自然さが残り，etの削除と買えない理由付けを付加すると良くなる，ということである。

8 この「停滞」という用語は，査読者からの示唆に基づいて採用させて頂いた。

9 各事例の分析に入る前に，作例を用いて仮説を立て，その仮説をコーパスで検証していくという方法は，このようなニュアンスの差が関わる類似する連結詞の研究には不向きである。分析の際に分析者の経験則が無意識に働いていることがその原因の１つである。この従来の方法論の問題点については，川北（2004）を参照して頂きたい。あくまでも仮定的に，当該連結詞について有している知識を取り去り，いわば何もわかっていないものと仮定し，まず事例観察を行うということ，そして事例に関してもある一定のコーパスの範囲の中に出現する全てを価値中立的に観察することに意義があると考える。

10 （本論文では言及していないが）他の類似する連結詞との相違点を考察する上で，同じ道具を用いて分析する必要があると考える。また，最終的にQQSの機能に推意が関係しないと判明したとしても，関係しないということを示すためには推意を明らかにして分析を行う必要がある。なお，本稿でも，自明であると思われる経験則や推意を敢えて書き記しているのは，筆者の分析過程である解釈の妥当性を読者にチェックしてもらうためである。同時に，Rossariの置換操作の当否の検討のためでもある。

11 筆者の先行論文では，Cは「引用箇所に至るまでの」としていたが，今回からは「引用箇所も含めてQQSに至るまでの」とした。このCの記述が分析者の主観に依っているのではないかという指摘があろうが，この点は致し方ないのではないかと思う。何故ならば，連結詞はその直前の明示的発話P，あるいはPから推論される暗黙の推意αと直後の発話Qとをつなぐものであるので，PまたはαのPの限定をする必要があるが，PはそもそもPに至るまでの発話から連鎖するものなので，結局厳密にはその連結詞に至るまでの文脈全てを把握する必要がある。しかし当然のことながら本稿で全てを引用するのは無理であり，取捨選択して提示するしかないと思われる。

12 詳細は，川北(2004)を参照されたい。

13 主体は，照らし合わせる経験則に，必ずしも納得，承認または共感しているとは限らない。

14 特定の経験則が想起され適用され用いられているのは，本論文の分析に限ったことではない。少なくとも連結詞の機能研究では，経験則や推意はわざわざ明示されていないが，暗黙のうちに分析過程で用いられている。この点については，例えば，本論文で紹介してい

るRossariの例文(2a)(2b)では，経験則に相当する「高価であれば買えない」が「このアパートは高い」に適用され，推意に相当する「このアパートは買えない」が導き出されていると推察される。従来から分析者はこれらを自明のこととして論じているだけのことである。また，日常生活においても無意識に用いられていると考えられる。経験則や推意を敢えて示すことによって無意識の直感が意識化され分析結果の妥当性の検討に有効となる。

15 本論文での「推意」はグライスや関連性理論のimplicatureの訳語「推意」とは異なり，経験則の適用によって導かれる結論である。また，implicatureは聞き手の立場からの推論によるものであるが，本稿では話し手側が自ら行う推論によるものである。また，本稿の「推意」は，一瞬の内に，無意識のうちに導かれるものであるので，明示されないことがほとんどであるが，明示の場合もありうる。

16 本稿での各例で，同様に「ＰとＱの関係づけ」と記しているが，全て「Ｐまでの流れを背景にしたＰとＱの関係づけ」という意味である。

17 経験則や推意は必ずしも非明示であるとは限らない。

18 「二人がジェノバで下町の宿屋に泊ることにした誘因」ではなく「アルフレッドの悪癖再開の誘因」と解釈する方が自然であるという指摘を査読者から頂いた。

19 *JMV*(p.58)にsoitが接続法半過去fûtとなっている例が１例あったが，QQSのみを扱うこととし，今回割愛した。但し，この例も本稿で示した機能で説明される。

＊本稿の執筆にあたり，的確なご指摘とご助言を下さった査読者の方々に感謝いたします。

参考文献

CELLARD,J.(1996) : *Le subjonctif*, Paris, Duculot

DUPRÉ,J.-P. (1972) : *Encyclopédie du bon français dans l'usage contemporain*,. Paris, Éditions de Trévise

GREVISSE.M.(1987): *Le Français Correct*, Paris, Duculot

GREVISSE,M. et A.GOOSSE (2008) : *Le Bon Usage*, Bruxelles, De Boeck Duculot

GRIEVE, J., (1996): *Dictionary of Contemporary French Connectors*, Routledge

LE BIDOIS, G. et LE BIDOIS R.(1968) : *Syntaxe du français moderne*. Paris, Picard.

MOREL, M.-A.(1996): *La concession en français*, Ophrys.

NAZARENKO, A.(2000) : *La cause et son expression en français*, Ophrys.

NØJGAARD, M.(1992) : *Les adverbes français-Essai de description fonctionnelle-*, T.1et 3, Copenhagen, Royal Danish Academy of Sciences and Letters

ROSSARI, C. (1997) : *Les opérations de reformulation -Analyse du processus et des marques dans une perspective contrastive français-italien -* , Peter Lang,

ROSSARI, C. (2000) : *Connecteurs et relations de discours: des liens entre cognition et signification*, Presses Universitaires de Nancy.

ROSSARI, C. (2002): “Mais que sont donc les mots du discours ?”, in CAREL, M.(éd.), *Les facettes du dire hommage à Oswald Ducrot*, Paris, Kimé, pp.283-296.

WAGNER, R.-L. et PINCHON, J.(1962) : *Grammaire du français classique et moderne*, Paris, Hachette.

WINOGRAD, T. (1980) : “What does it mean to understand language? *Cognitive Science* 4-3, Reprinted in D. Norman (ed.), *Perspectives on Cognitive Science*, Ablex and Erlbaum Associates 1981, pp.231-264.

川北恭子 (2003):「Connecteurの機能解明のための方法論上の問題点－après toutの分析を通じて－」『études françaises』第36号. pp.1-17. 大阪外国語大学フランス語研究室

川北恭子 (2004):「連結詞研究の方法論を求めて」『『周辺』『TLLMF』合併号－森本英夫先生古希記念号－』. pp.39-50. シメール社

川北恭子 (2006a):「Connecteurの機能解明のための方法論上の問題点(2) － de toute façonの分析を通じて－」『études françaises』第38号. pp.1-21. 大阪外国語大学フランス語研究室

川北恭子 (2006b):「après toutの機能分析」『大阪外国語大学論集』第34号. pp.37-63. 大阪外国語大学

川北恭子 (2009):「de toute façonの機能分析」『études françaises』第40号. pp.1-33. 大阪大学外国語学部フランス語研究室

坂原茂(1985)：『日常言語の推論』，東京大学出版会

中村雄二郎（1993）：『共通感覚』岩波書店

西阪仰 (2001) :『心と行為―エスノメソドロジーの視点－』岩波書店

例文出典

QF=Brigitte Aubert (1992) : *Les quatre fils du Dr March,* Editions du Seuil, Collection Points.

CM=Serge Brussolo (1994) : *Le Chien de Minuit*, Le Livre de Poche.

LES=François-Olivier Rousseau (1999) : *Les enfants du siècle*, Editions du Seuil, Collection Points.

JMV=Jean Echenoz (1999) : *Je m’en vais*, Editions de Minuit.